慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	天理大学附属天理図書館蔵『落窪物語抄』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.52- 63
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0052
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天理大学附属天理図書館蔵『落窪物語抄』解題・翻刻

石川　透

解題

天理大学附属天理図書館蔵国籍類書のうちに、目録題を『落窪物語抄』とする一冊本が存在する。本書には、題名に用いられた『落窪物語抄』（内題「をちくほのさうし」）の他に、注目すべき五つの小作品が収められている。それらの中には、今日まで知られていなかった作品や、新たに問題提起すべき作品も含まれる。ここに、個々の作品について簡単な紹介をし、あわせて、本書の約半分の分量を誇る『落窪物語抄』の全文を翻刻紹介したい。

本書の書誌は以下の通り。

函架番号、081イ21 265（国籍類書第二六五冊）。小型綴葉装、一帖。竪一二・〇糎、横九・三糎。料紙、斐紙。香色地金砂子散し表紙。外題、「よひの雨一／たちき〳〵二／たんか五／あふつのふみ三／ふくろふのさうし四／おちくほのさうし六」と打付書。内題、個々の作品の冒頭に、「よひの雨」「立聞」「あふつの文」「ふくろうのさうし」「短歌」「をちくほのさうし」とある。墨付、百五十五丁。毎半葉、六行。字面高、九・八糎。筆写時期、〔近世初期〕。天理図書館の所蔵印の他に、「松平家蔵書印」の所蔵印がある。

以下、本書所収の六作品について略述する。

「よひの雨」「立聞」

この二作品の内容は、従来『十番の物あらそひ』として室町時代物語に分類されていたものである。『十番の物あらそひ』自体は、早くは萩野由之氏が『新編御伽草子』本の頭注で、

此以下前段と接せず別種のやうにも見ゆ

と指摘されたように、二つの内容からなっている。そのうち前半の内容は『十番の物あらそひ』という題名にふさわしいのであるが、後半は別の設定による作品とすべきであり、二作品接合の可能性が残されていた。「よひの雨」「立聞」は、『十番の物あらそひ』の内容が二分された形をとっており、まさに二作品接合を裏付けるものなのである。実は、『十番の物あらそひ』と同内容の作品は、他にも多く伝存し、「女房艶書合」「女房艶語合」「十番艶書合」「源氏拾貳段」「立聞」といった題名になっているのである。現在十数本の

伝本を確認できたが、書名・内容を含めて、問題は多岐にわたるようであるから、別稿に譲りたい。

「あふつの文」

『群書類従』等に収められている、阿仏尼の『乳母のふみ（庭のをしへ）』のうち、略本系に属する。「よひの雨」「立聞」が室町時代の女子教訓的な作品であるのに対して、本作品は鎌倉時代の女子教訓書である。

「ふくろうのさうし」

室町時代物語に『ふくろふ（うそひめ物語・鳥物語）』が知られているが、本作品はそれらとは別本である。本作品については、本誌次号に紹介する予定である。

「短歌」

「短歌」という題であるが、今日いうところの長歌である。二百七句に及ぶが、その終りに、

当世の若衆たち、あまりになさけしらぬやうにいらせ給ひ候まゝ、きやう気の為に短歌とやらんよめるまねをつらね置なり。若衆のためと侍れは、ちこかつしきなとは我身のうへにはあらぬ事とおほしめしては、ふかく〳〵うたてしき事成へし。たゝ少人のためなれは、心あらん人〳〵も、又なさけしらぬひと〳〵は殊に朝夕見給ふへし。

かくいへはにくしと人やおもふらんさりとては又あり明の月

と、その成立事情が記されている。

「をちくほのさうし」

目録題は『落窪物語抄』であるが、外題「おちくほのさうし」・内題「をちくほのさうし」とある。外題・内題からみると、室町時代物語の『落窪の草子』と同一になるが、本作品の内容は、平安朝『落窪物語』の抄出本である。『落窪物語』は、古写本が少なく、古くても室町後期のものである。本書は近世初期の写本であるから、『落窪物語』の最古本とさほど隔たらぬ時期のものとなる。

物語の抄出本としては、『源氏物語』の『源氏大鏡』『源氏小鏡』等が有名であり、その写本群の多さからも、中世における抄出本の流行は明らかなことである。『落窪物語抄』も、それらの抄出本を手本として成ったものであろう。『落窪物語抄』の場合、その分量は『落窪物語』の十分の一程度である。全体の骨格がわかるように、『落窪物語』の冒頭と巻末の部分は比較的忠実に取られている。また、全体からみれば、比較的に和歌とその前後が多く取られ、さらには、面白の駒の登場場面や車争いの場面等、読者に興趣をさそう箇所が引かれているのも特徴の一つである。

その引用の仕方を、『落窪物語』と比較できるように掲出してみよう。『落窪物語』は、現在刊行されている諸本のうち、本作品に比較的近い本文を有する『日本古典文学全集』（底本・実践女子大学図書館常磐松文庫蔵本）本を使用させていただいた。

最初に、物語冒頭の箇所を掲出すると、

『落窪物語』

今は昔、中納言なる人の、女（むすめ）あまた持（も）たまへるおはしき。

『落窪物語抄』

昔、中納言なる人、むすめ勝多もちたまへるをはしき。大

大君、中の君には婿どりして、西の対、東の対に、はなばなとして住ませたてまつりたまふに、「三四の君、裳着せたてまつりたまはむ」とて、かしづきそしたまふ。また時々通ひたまふわかうどほり腹の君とて、母もなき御女おはす。

となるように、明らかな誤読・誤写はあるものの、比較的忠実に本文を抄出しているのである。しかし、中世の物語類によくみられる、抄出者による自由な書き変えや大胆な省略も間々みうけられる。『落窪物語』巻四冒頭の部分を掲出すると、

『落窪物語』

かくて、やうやう中納言重く悩みたまへば、大将殿いとほしく思し嘆きて、修法などあまたせさせたまへば、中納言、「何かは。今は思ふことも侍らねば、命惜しくもはべらず。

『落窪物語抄』

其後、おもくなやみたまひて、かきりのさまなれは、たいしやう殿も北の方も、山々寺々いたらぬくまなく、御いのりやなにやとさはき給ふを、源中納言、何か、今はいのちおしくも侍らん。

君、中君にはむことりして、西みかしの君は、もきせたてまつりたまはんとて、かしつきそし給ふ。又時々かよひ給ひけるはかんとをりはらの君とて、母もなき御女おはす。

のように、本文を中世的に書き変えているのである。また、物語の終りを、

いと目出度し〳〵

でしめくくっているのも中世的な特徴の一つといえよう。

なお、本作品の巻末に、

此さうしは、をちくほの物語とて、四帖侍るを、大かた書ぬきて、いさゝかしるしつけ侍り。

と記されている。しかし、この記述が誰によるものかは不明である。恐らくは、物語の抄出が流行した中世から近世初期にかけてのものであろう。

以下に『落窪物語抄』のうち、「をちくほのさうし」の全文を翻刻する。翻刻に際しては、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、句読点を多く施した他、（ ）をもってママを示した。

最後に、翻刻掲載の御許可を賜わった天理大学附属天理図書館に厚く御礼申しあげたい。（天理大学附属天理図書館本翻刻第四二六号）

をちくほのさうし（内題）

昔中納言なる人、むすめ勝多もちたまへるをはしき。大君中君にはむことりして、西みかしの君は、もきせたてまつりたまはんとて、かしつきそし給ふ。又時々かよひ給ひけるはかんとをりはらの君とて、母もなき御女おはす。北の方、心やいかゝおはしけん、つかふまつるこたちの数にたに覚したらす、しん殿のはなち出の、またひとまなるをちくほなる所の、ふたまなるになんすませ給ひける。君たちともいはす、御かたとはましていはせ給ふへくもあらす。名をつけんとすれは、さすかに、とのゝおほす所もあるへしと、つゝみ

給ひて、落くほの君といへと宣給へは、人〳〵もさいふ。殿も、ちこよりらうたくや覚しつかす成にけん、増て北の方の御まゝにて、わりなきことおほかり。はか〳〵しきひともなく、めのともなかりけり。たゝ、おやのおはしける時よりつかいつけたるわらわの、されたる女、うしろみとつけてつかひ給ける。あわれにおもひかはして、片時たちはなれす。さるは、此君のかたちあり様、かたほなる所なく、らうたけにいつくしくて、かくわさとかしつき給ふ御むすめたちには、まさりたまへと、しる人なし。

やう〳〵おほししるまゝに、世の中に住かひなき身のほと、哀に心うくのみおほされて、かくのみそうちなく。

日にそへてうさのみまさる世中に
心つくしの身をいかにせん

つく〳〵といとまのあるまゝに、物ぬふことをならひつゝ、いとをかしけにひねりぬひ給ひけれは、いとよかめりとて、北の方より、ふたりのむこのさうそく、いさゝかなるひまなく、かきあひぬわせ給へは、しはしこそつれ〳〵の慰めともおほししか、よるもひもねす、くるしきことまさりて、侘しけれは、打なきてぬふ儘に、

世間にいかてあらしとおもへ共
かなはぬものは浮身成けり

うしろみと云は、髪なかくをかしけなれは、三の君のかたへ、たゝめしにめしいつ。うしろみ、いとほゐなくかなしとおもふ事かきりなし。うしろみといふなひんなしとて、秋とつけ給ふ。

かゝるほとに、三の君の男也蔵人の少将の御かたなるこたち萩とて、いとされたる男、此あきにふみかよはして、とらへてのち、いみしうおもひてすむ。かたみにへたてなく物かたりしけるつゐてに、此君の御事をかたりて、いかておもふやうなる人にぬすませ奉らんと、明暮あたら物といひおもふ。

このたちはなのめをやは、左大将と聞ゆる御子の、右近の少将にておはしけるをなん、やしなひ奉りける。まためもをはせて、人にとひ聞給ひ、つゐてに、たちはき、落くほの君のうへを語聞えけれは、少将みゝとまりて、しつかなるひとまに、こまかにかたらせて、哀かり給て、我にみそかにあはせよと宣給へは、只今は世にもおほしかけたまはしなと申つゝ、あこきにかくなんとかたりけり。君はひとりふして、いもねられぬまゝに、母君われをむかへ給へとおほし入て、

我につゆ哀をかけは立帰り
ともにむかへよ浮世はなれん

そのゝち、少将殿よりふみあり。

君ありときくに心を筑はねの
みねと恋しき歎をそする

又、薄につけて、

ほに出ていふかひあらは花薄
そよとも風にうちなひかなん

御かへりなし。しくれいたくする日、さもきゝたてまつりしほとよりは、物をほししらさりけるとて、

雲間なき時雨の秋は人こふる
心のうちもかきくらしけり

御返事なし。又、

天の川雲のかけはしいかにして
ふみみるはかり渡しつゝけん

日〻にあらねと、たえすいひわたりたまへり。十日はかりをとつれたまはて、日比は、

かきたえてやみやしなましつらさのみ
いと〻ます田の池の水くき

うへのきぬ〻い給ふほとにて、御返りなし。

この殿には、ふるき御願はたしに石山にまふて給ふに、爰はかいすみて人すくな〻り、能折ふしなりとおもひて、たちわき、とかくおもひかまへて、少将を入奉り、あこきにもしらせさりけり。雨いたうふりたるに、少将たちき〻給へは、女君、ふしなからことをまさくりつ〻、

なへて世のうくなる時はみかくさん
岩尾の中のすみかもとめて

といひて、とみにね入ましき気色なり。又人はなかりけりと心やすくて、きのはしにて、かうしをいとよう放ちて、押あけて入ぬるに、君おもひかけす、いとおそろしくてをきあかり給ふを、ふとよりてとらへ給ふ。あこき、かうしのあけらる〻をとを聞て、いかならんとおとろきまとひて、おくれは、たちはきさらにをこさす。こはなそ、みかうしのなりつるを、なそと見んといへは、犬ならん、ねすみならん、なおとろき給ふそといへは、なてうとこそ、したるやうのあれはいふかといへは、何わさかせん、いとねふたきにねなんと、いたきてふしたれは、あなわひし、あなうたてと、いとをしくてはらたてと、うこきもせす、いとかひなし。君は、おもひやりしよりもちかまさりして、見さらましかはと、いと哀におほすに、女君、わりなくおそろしとおほして、なくより外の事なけれは、心苦敷て、様〻きこえなくさめ給ふさま、をしはかるへし。鳥のこゑすれは、をとこ君、

君かかく啼あかすたにかなしきに
いと恨めしき鳥の声かな

いらへ時〻はしたまへ。御こゑきかすは、いと〻よつかぬ心地すへしとのたまへは、からうして、あるにもあらす。

人心うきには鳥にたくへつ〻
啼より外の声はきかせし

あしたにふみあり。

いかなれやむかしおもひし程よりも
いまの間おもふ事のまさるは

とあれと、女君、心持あしとて、引かつき臥給へは、御返もなし。あこきそきこゆる。その夜もをはして、又のあした、

よそにては猶我恋を増か〻み
身に添陰といかてならまし

とあれは、けふなん御かへり、

身をさらぬ陰とみえては増か〻み
はかなく移ることそ悲しき

今宵は三日の夜なりとて、もちゐなと、やう〳〵と調て、待居たるに、雨いたうふりて、かしらさし出へくもあらねは、少将、今宵はかしこに忍いくましきなりけりと、思ひわつらひ給て、ふみあり。たちはきも、わたくしへかきそへてやりけれは、あこき、返事に、いてや、ふるともといふ事も侍るを、いと〻しき御心さまにこそあめれ。更にきこえさすへきにもあらす、なとかけり。君の御返には、たゝ、

世にふるを浮身と思ふ我袖の

ぬれはしめけるよひの雨哉

是を見給て、いとゝ哀さまさりつゝ、しろき御そ一かさねをき給て、いとかろらかに、たちはきはかりを召くして、大かさをふたりさして、よろほひをはする程、道中にて、車のさきおひつゝ、あまた火ともしてくる人あり。かくれんかたなく、わりなくてかゝまりゐたるに、人〳〵あやしみて、ぬす人か、何ものそとて、笠をほう〳〵とうては、あやしきものゝあるうへにかゝまりいぬ。色〳〵のからきめをみつゝ、行つき給ひぬ。

まつ、水にて御あしなとあらいけり。扨、女君のふしたまへる所により給て、かくはかりあはれにて来りとて、ふとかきいたきたまはゝこそかひあらめとて、よりふし給へるに、袖のすこしぬれたるを、男君、

なに事をおもへるさまの袖ならん

と宣給へは、女君、

身をしる雨の雫成へし

そのよ、もちゐなと参らせけり。明る夜は内へ参り給ふに、ゑをはせす、ふみあり。

さらてこそそのいにしへも過にしを
ひとよへたつることそ苦しき

返歌、

ひと筋におもふ心はなかりけり
いとゝ憂身そわく方もなき

誠、浮世はかとさせりともといふやうに、出難くなんとあり。此ふみを、これなり、おとしてけるを、蔵人少将とりて、三の君に見せ給へは、北の方もみ給て、いみしく腹たち給ふ。

其後、少将笛を忘れて出給へは、たてまつるとて、女君、

是も猶あたにそみゆる笛竹の
手馴るふしを忘るとおもへは

少将いとをしとおほして、

あたなりと思ひける哉笛竹の
千世もねたへんふしはあらしを

北方、中納言殿にいと心うく、浅ましき事ともきこえたまへは、誠とおほして、かんたうし給ひけり。扨、あやしき部屋のいふせく浅ましきに押籠て、外より戸をとちめてそをかれける。少将、かくなんと聞給ひて、いとかなしともおろか也。たゝなきに啼給ひて、いといみしけに御ほし入たるさまをきこえんとて、人ねしつまりて後、忍ひてあこき部屋の前にきて、かきを隔ていふに、女君も哀にかなしくて、更に物も覚ぬ程になん。対面は、

消帰り有にもあらぬ我身にて
君に逢みん事かたきかな

ときこえよとて、鳴給ふさまいみし。みそかに返りて聞ゆれは、少将いとゝ悲しくおもひまさりて、猶今一度きこえよ。あか君や、更にえきこえすなん。

逢事のかたく成ぬと聞宵は
あすをまつへき心地こそせね

立帰参道に、心にもあらす物しなりけれは、北の方、ふとをとろきて、へやのかたに物のあしをとのするは、なそといへは、あこき、とく罷なんと申せは、女君、爰にも、

みしかしと人の心をうたかひし
我心こそまつはきへけれ

と宣給ふを、取もはてぬやうにて、いそき帰り、かくなんときこゆれは、少将、只今もはい入て、北の方をうちころさはやと、むくつけきまてそ覚しける。返給てもひんきあらは奉れとて、文あり。いと心ほそけ成し御せうそこをおもひいつるに、いとわりなくなん、

命たにあらはとたのむ逢事を
たえぬといふそいとゝ悲しき

返し、はりのさきしてかけり。

人しれすおもふ心もいはてさは
露とはかなく消ぬへきかな

とおもひ給ふるこそとてもたり。やう〳〵と物のつゐてに出し給ふつ。扨も、てんやくのかみといふ物は、北の方のしたしきゆかりにて、六拾余なるものに、此君をとらせんとおもひよりて、北のかた宣給へは、いとも〳〵嬉しき事に侍るかなと悦つゝ、その日とやくそくしてけり。くちはみゝせゝまてゐみまけて、ありくさまいとをそろし。あこきに相て、しか〳〵と云に、あさましなといふもをろか也。いはんかたなくて、けふは御き日なれはといひのへぬ。月の夜は兎角逃れんかたなくて、なきあへるに、をしていりきたり。君は、たゝいましぬるわさもかなとおほし入て、もたへこかれたまふしるしにや、御むねをせきあけて、有かなきかに消入つゝものし給へは、あこき、つとさふらひて、やきいしなと兎角しつゝ、あくるをおそしとまちける心持、さらにいわんかたなし。

からうして明ぬれは、おきなも出ぬ。いつしかとふみたてまつる。少将よりも、れいのしのひてふみあり。てんやくのかみ、ふみまいらするよし申せは、部屋の戸あけられけるに、いとうれしくて、ふたつなからをし入たり。少将殿のを御覧すれは、いかゝ、日のかさなるまゝに、いといみしくなん。

君かうへ思ひやりつゝなけくには
ぬるゝ袖こそまつはしりけれ

返事には、

なけき侘隙なくをつる泪川
あふせもまたて消や果なん

翁のふみを見れは、いとも〳〵いとをしく、夜一よなやませ給ひける事をなん。翁も物のあしき心持し侍る。あか君〳〵、よさりたに嬉しき目みせ給へ。御あたりにたにちかく候はゝ、命のひて、心ちもわかくなり侍りぬへし。あか君〳〵。

老木そと人はみるともいかて猶
花さき出て君にみなれん

なを〳〵なにくませ給ふ・といへり。あこき、かへり事かく。

枯果て今はかきりの老木には
いつか嬉しき花は咲へき

とかきて、腹立やせんとおそろしけれと、覚ゆるまゝにてとらせたれは、をきな打ゐみてとりつ。その夜は、うちよりも庵さしをつよくして、戸をあけぬやうにこしらへてけるをしらて、かきにてじやうをあけて、やり戸あけんとするに、いとかたけれは、たちゐひろくを、あこき、少とをかくれてみたてるに、かみしもさくれと、さしたる程をさぐりあてす。あやし〳〵、内にさしたるか。をきなをかく苦しめ給ふにこそありけれ。人もみなゆるし給へる身なれは、ゐのかれたまはし物をといへと、誰かはいらへん。打たゝき、をしひけと、内外につめてけれは、ゆるきたにせす。今や〳〵と、夜ふくるまていたの上に居て、冬の夜なれは、身もすくむ心ちす。

その比腹そこなひたるうへに、きぬいとうすし。いたひへのほりて、腹こほ〳〵となれは、翁、あかま、ひえこそ過にけれといふに、しゐてこほめきて、ひち〳〵と聞ゆるは、いかになるにかあらんとうたかはし。かひさくりて、出やするとて、しりをかゝへてまとい出る心持に、しやうをついさして、かきをはとりていぬ。あこき、かきおかすなりぬるよと、いとゝにくくおもへと、あかす成ぬるをかきりなく嬉敷て、やり戸口によりて、ひりかけしていぬれは、よもまうてこし。おほとのこもりねといひかけて、しもにをりぬ。

爰には、むこの蔵人の少将、あすのりんしの祭りにわたり給ふを、三の君にみせ奉らんとて、ねきりをるを、あこききゐて、いと嬉しきひまあるへかなりと、むねうちさきつゝ、少将殿は、此君をぬすみ出すへき事をのみたくみ給ふに、さはおもふことの、かなふへきそかしと嬉しくて、しか〳〵ときこえさすれは、その心まうけし給ひて、爰にはしはしすまし。二条にすまんとて、さうしの事なと宣給ひて、明るをおそしとまち給ふに、この殿には、三四の君北のかた中納言、みな引つれのゝしりて出給ふ。扨あこきつけにはしらせたれは、少将いつも乗給ふ車にはあらぬに、くちはの下すたれかけ、をのことも(ママ)おほくてをはしぬ。たちはき馬にてさきたちおこせたまへり。車をたゝよせによす。こたちのとまりけるも、みなしもにをりて人もなき程なり。あこき、はやうをり給へといへは、少将をり給ふ。部屋にはしやうさしたり。ひねりて見給ふに更にうこかねは、たちはきとふたりしてうちはなちて、やり戸を引はなちつれは、たちはきは出ぬ。君をかきいたきて、車に乗給ひぬ。あこき御くしの箱引さけてのりぬれは、とふやうにして出給ひぬ。たれも〳〵いと嬉し。門たに引出ぬれは、をのことも(ママ)いとおほくて、二条殿におはしつきぬ。人もなけれは、いと心やすしとて、をろし奉りて、打やすみつゝ、この日比の心つくし、互になきみわらひみかたり給ふさま、たゝをしはかるへし。彼殿には返りて見給ふに、いと浅ましく、おもひの外なる心持して、たれも〳〵おとろきまとへり。かしこには、人なくていとあしかりなんとて、人もとめよとあこきに宣給へは、おはのもとへ人の事いひつかはす。をとこ君内へ参りて、たゝ今出侍りとて、

唐衣きてみる事の嬉しさを
つゝまは袖そほころひぬへき

と宣給へは、女君、

浮事をなけきし程に唐衣
袖はくちにき何につゝまん

かゝる事をは夢にもしらて、中納言は四の君を此少将殿に奉らはやとて、父大臣の御気色とり給へは、少将殿にしか〳〵との給ふを、いとよかめりと宣給へは、うれしときゐて、まふけしのゝしる。爰に北の方御をちにて、世の中にひかみしれたる物におもはれて、治部卿・か(なる)、ましらふ事もなき人の大郎(ママ)、兵部少輔といふ人あり。かれにいひあはせて、われとおもはせつゝやるへきやうをかたらひ給へは、打うなすきていたり。

二条にをはしたれは、雪のふるを見いたして、火おけにをしかゝりて、はいまさくりてゐたまへる。いとをかしけなれは、むかひいたまへるに、女君、

はかなくて消なましかは思ふ共

と宣給ふに、少将、

いはてを恋にみやこかれまし

中納言殿には、その日になりて、しつらひなと、なのめならぬさまにて待給ふに、初束のことく、兵部少輔うちさうそきていきけり。かゝるしれ物ともしらて、ふし給ひにけり。明ぬれは出ぬ。少将おほしやるに、いとをかしくて、そのつとめて、かやうに書てやり給へ。いとをかしきことそとて、かきてやり給ふ。

世の人のけふのけさには恋すとか
きゝしにたかふ心持こそすれ

いとうれしくて、いそきかきてやりつ。返し、

をひの世に恋もしらぬ人はさそ
けふのけさをもおもひわかれし

又の夜もしらて、三日のいわひに、中納言もむこたちも、対面せんとて、まうけいかめしうして待居給ふに、をはしたり。こなたへとよはすれは、ゆつりもなくのほりていぬ。火はいとあかきにみれは、くひよりはしめて、ほそくちいさくて、面はしろき物をつけけさうしたるやうにてしろう、はなをいらかして、さしあふきゐたり。人〳〵いと浅ましう成てまもるに、此少輔にみなしてねんせす。ほゝとわらふ中にも、蔵人の少輔は、はな〳〵と物わらひする心にて、わらひ給ふ事限なし。面白のこまなりけりやと、あふきをたゝきてわらひて立ぬ。殿上にても、おもしろのこまはなれてきたりとてわらふ也けり。皆人〳〵立てさう〳〵しけれは、少輔はしたなくて、れいのかたより入ぬ。中〳〵に世の人聞も是にさへ捨られたりといひ、さたせん事の猶くちをしく、恥かましけれは、扨こそやまめといひて、腹たちなけき給ふ事限なし。あやにくに程なく、たゝならすさへなく成給ひて、御むすめまうけ給ふ。ちゝにもはすいとをかしけなり。その後、余にわらひける程に、少将もいかす成にけり。

又三の君のもとに通ひ給ふ蔵人の少輔をは、おもふ心ありて、少将殿の御いもうと中君にあはせんとおほして、ほのめかし給へは、いとうれしき事とて、よき日してかよひそめ給てのちは、三の君のかたへはふみたに聞えたまはす。名残なき様なり。北のかた聞給ひて、腹立給ふ事なのめならす。

又右大臣ときこゆる人の、たゝひとりかしつき給ふ御むすめ、この三位中将にと心よせ給ひて、男君の御めのとのもとにたよりありて、いはせたまへれは、御めのと、かくなんと申に、ひとり侍るほとならは、いとかしこきおほせならましを、かよふ所あるやうに申給へとてたち給ひぬ。されと、御めのと、いと嬉敷御事也。今よき日してふみも奉らんなといひやりたれは、彼殿には四月にもとおほしまうけたり。此よし女君にきこえさする人ありけれは、心うしとおほすけしきやしるかりけん、何事にやおほしへたつる心ありけりとうらみ給へは、女君、

へたてける人の心をみくまのゝ
浦の浜ゆふいくへなるらん

をとこ君、されはよ、おほすことありけり。

ま野の浦にあふる浜ゆふかさねなて
ひとへに君を我そおもへる

梅を折てみせ給へは、

さそふなる風に散なは梅花
我や浮身に成果ぬへき

其後、御めのと、右大臣殿の御事をまめやかに申れは、されは此事をきゐて、おほしうたかひけるにこそとおほすに、ちりつくべく

もあらす、いひはなち給へは、ちからなくやみにけり。いつしかたゝならぬさまになやみ給ひて、正月に若君まうけ給ふ。いとめてたし。このつかさめしに、御父大将殿は、かけなから大臣になり給ふ。宰相中将は中なこんにあかり、蔵人の少将は中将になり給ふ。又のとしの秋、又おとこ君出きたまへり。このたびのはおほち大臣むかへとり給ひて、かしつき給ふ事限なし。其年の加茂の祭り見物にとて、一条おほちにこの殿の御さしきしたり。車弐拾両あまり引つゝきて出給ふに、源中納言殿の車、この御さしきのむかひに二両たてたりしを、すこしのけさせよと宣給へは、御供の人〳〵さいふに、口こわくてきかす。兎角いさかひてのち〳〵は、此車をたゝをしにをしやりて浅ましきに、てんやくのかみ出てせいすれは、わさとなかあふきをさし出して、かふふりをはくと打おとしつ。もととりをかゝへてたてるをみて、物みる人ともゆすりてわらふ。袖をかつきていぬるを、一あしつゝける。扨車にかけてをしやるに、ともの人ともわなゝきて、車に急よらす。床しはりをふつ〳〵ときりけれは、大ち中に、はくと引おとしぬ。物みる下らうとも、わなゝきさはきわらふ事限なし。いと浅ましかりし事共也。又清水へ参り給ふにもたゝかくのことし。こりぬやしりぬやといわせ給ひけり。又三条に落くほの母君の家ありけり。此君にゆつり給ひしかと、あとなくうせ給へは、今はをのかりやうせん所そとて、源中納言、わたりすまんため、あらためつくりみかきて、あすわたり給はむとて、万の道具てうともはこひわたし給ふを、中納言殿いとよく聞給て、にくさけにをのことものつかはして、おさへ給ふ。いか成あたにか、たひ〳〵かく恥かましくからきめをのみみせ給ふらんと、心得かたくねたく、いみしともよのつねならぬと、この御おほえ、いきをひにあらそひ聞え給ふへきやうなけれは、まいり給て、さるへき人〻して御気しきとり給へは、この家はけんを持たる人なんしるへき。何しに源中納言しらるへきとて、をしてわたり給ひけり。

扨三日後にそ御むすめの事あらはして、対面せさせ奉り、さま〳〵の御もてなし。申はかりなし。すなはち此殿をもたてまつり給ふ。北のかたは今さら身のおき所なく、はつかしさもめさましさもいひやるへきかたなく、目もくちもひとつになる心持し給へり。三四の君も是を聞て、四の君、

人の上と昔はみしをありふれは
いまは我身そ浮世なりける

三君、実とて、

浮事のふちせに替る世中は
飛鳥の川の心持こそすれ

四君の御かたへ、北のかたよりふみにて、

忘れにし常盤の山の岩つゝし
いはねと我は恋はまさらし

御返事、

打捨て別し人をそことたに
しらてまといし恋はまされり

角て中納言殿、今は大納言にて大将かけ給へり。源中納言は七十になり給へは、大将殿の北のかた賀の事つかふまつり給へり。その程の事をしはかるへし、その外後世の為とて、たうとくいみしき事ともをし給へは、いつしか此御むすめの御とくをのみ見給て、むかし心より外にあやしくみはなち給へりしそのかみも、くやしくはつかしくおほしけり。

其後、おもくなやみたまひて、かきりのさまなれは、たいしやう殿も北の方も、山々寺々いたらぬくまなく、御いのりやなにやとさはき給ふを、源中納言、何か、今はいのちおしくも侍らん。たゝおもひ置事とては、我身の大納言にえなるましきほうにて、死侍らんこそ心に残侍れと宣給へは、大将殿は、我身の大納言をしゝ申て、源中納言にゆつり給。いみしく悦哀給ふさまかきりなし。扨今はかきりの時、七人の子ともよひ給ひて、所々のしやうのけん、おひなとり出て、すこしもよろしきは、只大将殿の北の方にのみ奉給ふ。この家三条殿も、もとより此君のしり給へき所なれはとて奉り給ふを、きたのかたいとつらくあさましくて、恨なけきたまへと、聞入たまはて、つゐに果たまへは、大将殿より後の事なと、いかめしうせさせ給ふ。さほうおもひやるへし。北の方、御いみに三十日籠り居たまへは、大将日々に立なからをはして、なくさめ給り。

涙川我泪さへ落そひて
君かたもとそふちとみえける

と宣給は、女君、

袖くたす泪の川のふかけれは
ふちのころもといふにそ有ける

角て三十日も過ぬれは、いそき二条殿へむかへ給ふ。はかなく月日もたちて、大将は右大臣に成給ふ。いとめてたし。此始のおとこ君は、十二にて元服し給ふ。その御おとゝも、おほちおとゝをとらしと殿上をさせ給へり。その御いもうとの女君、八にていみしううつくしくそおはしける。そのおとうとも六つ、をのこゝ四つにておはしけり。又此比もうみ給り。日に添て目出度さかへ給ふ。扨此をとゝの御父は、おほき大臣とそきこゆる。御賀つかふまつり給へり。まゐは此二所の若君なん舞給ひける。万いかめしく、世の例にもとおほしをきてたれは、めてたき事ともさらにいはんかたなし。扨も面白のこまの四君、ひとり住給へる、いとをしとて、右の大臣の御はからひにて、中納言なる人にあはせ給ふ。其朝かれより、

逢事のありそのはまの真砂をは
けふ君おもふかすにこそとれ

御返事、四の君、

我ならぬ恋のみおほきありそ海の
はまの真砂は取つきにけん

此中納言は筑紫の国司にて、此晦日わたりに皆名残をしみて、彼四君なとはたゝなきに鳴給ふ。北のかたより、さま〳〵のきぬ、なへてならぬさまにて、色〳〵の物とも取くしつゝをくり給ふとて、

遙〳〵と峯の白雲たち隔
又めくりあはん程のはるけさ

ときこえ給へり。四君、さらに聞えさせんかたなくこそ。

白雲の立空もなく悲しくて
わかれ行へきかたもおほえす

彼面白のこまの姫君もくしてくたり給ふに、北の方より、

をしめともしゐて行たに有物を
我心さへなとかをくれぬ

御返り、

身をわけて君にしそふる物ならは
ゆくもとまるもおもはさらまし

おもしろのこまより、こかねしてすき箱を衣箱の大きさにむすへる

に、くちはの薄物しつゝ、身につゝみて入たり。いつこよりそととへと、使はかへりうせにけり。見れは、うす物うみの色にそめてしきり、こかねのすはま中にあり。ちんの舟ともうきて、島に木ともおほく植て、すさきいとおかし。物やかきたると見れは、しろきしきしに、いとちいさくて、ふねにをしつけたり。

今はとて島漕はなれ行舟に
ひれふる袖をみるそ悲しき

きこゆるからに人わろし。よし〳〵きこえしと書たり。をもしろのこまの手なり。是を見て、さすかにおもひ出給けり。いたいけなる物なれはとて、おほひとのゝ北のかたえ奉りけり。をもしろのこまはおもひよらさりけれと、いもうとも心ありけれは、子なとあれはと、たゝにやはとてしたるなりけり。

かくていそきたちて、そつはくたり給ひぬ。扨おほいとのゝ姫君、十三にて御裳きせたてまつり給ふ。とし返りては、姫君内に参りたまはんとて、限なくかしつき給ふ。帝は、おほいとのゝ御いもうと后宮の御腹の一の宮にておはしませは、年なれぬ御事にて、いつしかとまいらせ給ふ。きしき、いはすともおもひやるへし。おほい殿は帝の御をちにて、関白し給ふ。天下の事御心のまゝにそおこなひ給ける。かゝるほとに、大臣殿御心持なやみ給て、大政太臣を御子にゆづらせ給ひて、入道し給ふ。大臣はいまた四十にたにたりたまはて、位を究め給ふ事、目出度しとよのつねなり。御むすめの女御、后にゐ給へり。太郎君、佐近衛の少将に成給ふ。次良君も、祖父入道殿、おなしやうになしなしのほらせ給ひけり。殿の北の方、御さひはひめてたしとはふるめかしや。おちくほに、ひとへに御はかまのほとは、かく太政大臣の北の政所、后の宮の御母とはみえたまはさりきとそ、猶むかしの人はいひける。

三の君をは中宮の御くしけ殿になんなし奉り給える。そつはにんはてゝ、いとたいらかにのほりたまへり。四君、まちつけて、はゝ北の方うれしとおほしたる、事はりそかし。かくさかへ給ふをみよとや神仏もおほしけん。とみにもしなて、七十余迄なんいきける。角て入道おとゝ、かくれ給ひぬ。おほき大臣の君たちは、佐大将右大将にてそ、つゝきてなりあかり給ひける。おもしろはやまひつきて、法師に成にけれは、をとにもきこえぬ成へし。かのてんやくのかみは、けられたりしをやまひにて死にけり。角てをはしますも、みすなりぬるそくちおしき。なとてあまりけさせけん。しはしいけておひたへかりけるとそ、男君のたまひける。むかしのたちはきは、北の政所のけいしにて、和泉守に成て、御とくいみしう見けれは、あこき今は内侍の助になるへし。いと目出度し〳〵。

此さうしは、をちくほの物語とて、四帖侍るを、大かた書ぬきて、いさゝかしるしつけ侍り。